

婦人宣教師の活動



1896年 バプテスト婦人宣教師会の年会
(日本バプテスト宣教100年史より)

元関東学院大学教授
関東学院教会 大島 良雄

2024年4月11日、105歳の誕生日に

婦人宣教師の活動

元関東学院大学教授 大島 良雄

1871年に約200名の婦人がボストンに集まって American Woman's Baptist Foreign Mission Society (米国婦人バプテスト外国伝道協会)を結成した。それは「外国婦人のキリスト教化」を主目的とし、ABMU (アメリカン・バプテスト宣教師同盟)を通じて婦人宣教師を任命した。来日した婦人宣教師は、主としてシカゴの同協会から派遣されて来た婦人たちだった。

同協会から最初に派遣されて1875年11月に来日したのはミス・クララ・A・サンズ (Clara A・Sands)と、ミス・H・キダー (Anna・H・Kidder)の2名の婦人宣教師であった。

本稿においては、彼女たちを始めとして、女学校などで活躍し資料の入手が比較的容易な婦人宣教師について記述した。しかし、彼女たちの働きを支え、無名に終わっている婦人宣教師たちの大きな貢献にも敬意と謝意を表したい。

1, Clara A・Sands クララ.A. サンズ

(第一期 1875-1886)

サンズは1844年7月にニューヨーク州サウスポートに生まれ、オハイオ州フィメール大学を卒業した。1875年に来日し横浜山手75番地に居を定め、ブラウンの伝道、ブラウン夫人の学校を助け、バイブル・ウーマンや男子伝道師を養成して、神奈川県下その他で積極的な伝道活動を展開し、また教育事業にも従事した。

彼女が大きな貢献をしたのは伝道活動で、そのため彼女はバイブル・ウーマンを養成した。サンズは彼女らと一緒に家々を訪問し、また多くの場所で集会を開き、八王子、小田原、甲府までも出かけた。

サンズに養成された男子伝道者には小林健次、鈴木重蔵、尾作昇平、伊達謙などがいた。彼女の伝道活動の具体的な例として原町田で活動の一例を見ると、「宿屋では大きな部屋に通された。襖を開き、四部屋を大きな一つの部屋にした。最初の夜には 200 名ばかりが集まった。第二夜は雨のためにそれほど多くなかったが、4～5 名が質問し、磯部さんは 12 時過ぎまで寝られなかった。……第三日目は偶然、町の縁日に当たっていたので、我々は宿屋の二階のベランダから語り掛けた。午後の 1 時から 4 時まで、ベランダの上から群衆の注意を引くために讃美歌を歌い、讃美歌を間に入れながら順番に語り掛けたが、話が終わるたびに彼らは、もっと話せと言った。常に 500 名ばかりの人が聴いていた。」と報告している。

その集会のために宣教師 2 名（サンズとポート夫人）男子の伝道者数名、バイブル・ウーマン数名、聖書販売人などが一団となって、祈祷会、讃美歌練習などで準備した後、数日間一ヶ所に留まって総力を挙げて集中的に伝道した、と報告している。

サンズは 1882 年 2 月 9 日に長後教会を設立した。彼女のあまりにも活発な活動に対してベンネットは、「サンズは自分自身をブラウン博士と全く同じ宣教師だと考えており、誰にも従属しないと考え、500 名の男女に説教するのは彼女の特別の喜びとしてい

る」と、少し非難めいた報告をしているが、それは彼女の果敢な活動への教役者たちの非難に対する弁護も含まれている事に留意する必要がある。

1886年に休暇で帰国し、結婚して1890年に再来日したが、その時は宣教師夫人であり、婦人宣教師の範疇には属さなくなったので、彼女の婦人伝道師としての働きは1886年までである。

参考文献

大島良雄 『日本につくした宣教師たち』 ヨルダン社 1997

2, Anna H. Kidder アンナ・H・キダー

1873年2月7日にN. ブラウン(Nathan Brown)夫妻と、J ゴーブル(Jonathan Goble)夫妻が来日し日本宣教を開始した。彼らに続いて、婦人伝道師のキダーとサンズは同年10月25日に来日した。ミス・キダーは1840年ニューヨーク州アマストに生まれ、カレドニア・アカデミーに学び、組合教会の信徒として



数年間、黒人の孤児院で教鞭をとった。その後、アメリカ婦人外国伝道会社の宣教師として来日し、大正2年11月23日、駿河台において永眠するまで、その間30有余年、休職のために帰国したのは、ただ一回、それも短い間であった、と記されている。

『日本バプテスト史略 上』の記述を要約すると「鈴木町22番地で学校が始められた。当時外国人が居留地以外に住みたいと思

うと、『日本人の学校の雇われ教師』にならなければならなかった
ので、アルソル（アーサー James Hope Arther）もこのために
森有礼氏に雇われた。一学校でキリスト教を教える事が問題にな
った時、アルソルは心を痛めたが解決できなかつた。ミス・キダ
ーは彼がこの困難な問題に困惑していた時に来日された。」とい
う。

東京都公文書館編集の『都市紀要 九』にキダーの来日当初の
学校（後の喜田英和女学校）の様子を簡潔に述べられているのを
見ると、「最初の宣教師アーサー J. Hope Arther は来日するとき、
初代駐米大使であった森有礼と同船したよしみから、アーサーが
建てた洋館で男児を教えていたが、1875（明治8）年11月、ミ
ス・キダーの来任とともに女子教育にきりかえられた。女史は森
有礼の代理、藤井三郎に雇用されるという居留地外での慣習に従
って学校の経営と育英に当たった。校名も校主も度々変わったよ
うであるが、1880（明治13）年11月には北甲賀町十番地に転
じ、ミス・キダーにちなんで喜田英和女学校と改名された。」とあ
る。

添付の学校教則によると、教科内容は英学と漢字で修業年限は
5年、使用教科書としては、英学ではウィルソンリーダー（1-
4）、ブラウン会話書、カツケンボス文法書、コーネル及びミッチ
ェルの地理書、ウェーランドの修身書、バーレーの万国史などが
あげられている。和漢書では、日本地誌略、日本略史、十八史
略、皇朝略史、方正学文粹、日本外史、続日本外史、唐宋八大
家、日本政史、元明清略史、その他、数学例題などである。

その後、西紅梅町に転じた。1918年8月には駿台英和女学校に改称された。その頃は、市内では、桜井、明治、頌栄、東洋英和と共に、程度の高い学校として教えられていたという。その後、大正大震災前に廃校するまでその校名を変えなかった。

参考文献

高橋楯雄 『日本バプテスト史略 上』 1923 (大正12) 年

大島良雄 『バプテストの東京地区伝道』 ダビデ社 2009. 2010

都市紀要 九 『東京の女子教育』 東京都 1902 (明治36) 年

3, Clara A. Converse クララ A. カンヴァース

カンヴァースは1857年4月18日に米国バーモント州グラフトンに生まれた。師範学校を卒業し小学校へ就職。その後バーモント・アカデミーに学んでいた時に海外伝道に関心を持ち、人間の魂に触れる大切な仕事に従事するには、まず自分自身を磨かなければならないと思いながら、更にマサチューセッツ州のスミス・カレッジに学んだ。卒業後は外国伝道に従事せよとの



神の声を聞き、宣教師を志願し、1890年1月、日本派遣の宣教師として来任した。横浜への船旅では休暇を終え日本へ戻るミス・キダーと同室したので、彼女から日本宣教の実情について多く学

ぶ事が出来たことだろう。

1890（明治23）年1月23日に三週間の船旅を終え横浜に上陸し、山手居留地67番地ブラウン宅に着いた。彼女が案内された「英和女学校」の小さな校舎では5歳から17歳の生徒23名が3つのクラスに分かれて学んでいた。同年9月、ブラウン夫人のあとを受けて英和女学校の校長に就任した。

1891年9月には学外における宣教活動として太田にキリスト教講義所を開き、日曜学校を始めた。

また同年、学校を山手居留地34番の新校舎に移し、メアリー・L・コルビー・スクールと改称し、翌1892年に和名を捜真女学校とし、学則を定め、就業年限を12年と定めた。

1899年、治外法権が撤廃され、捜真学院も日本政府の管理下に入るが、私立学校令による学校として認可された。

1910年9月、学校を山手34番から神奈川青木町（中丸）に移す。

1911年3月のGLEANINGSによると「カンヴァースは神奈川への移転を決め、富士山を遠望する美しい通常の高等女学校と技芸と英語の二年制補修科を開設した。その学校は幼稚園、小学校、中学、高校を併設する捜真学院に発展し現在に及んでいる。」とあるが、当初は畑地に建てられた学校への通学路が雨の日には泥濘化し通学生に苦勞を強いた。

1925年7月、捜真女学院校長を辞し、名誉校長に推された。

1935年1月、咽喉麻痺により永眠。

参考文献

- 捜真女学校同窓会 『カンヴァース先生』 1962（昭和37）年
学校法人 捜真学院 『カンヴァース先生』 2021年4月

4, Lavinia Mead ラビニア・ミード （在任期間 1890-1926）

彼女は、1860年4月26日、ウィスコンシン州ニューリスボンに生まれた。1887年ビルスバリー・アカデミーを卒業し、6月に婦人バプテスト外国伝道協会の宣教師に任命され、同年10月、南インドのオンゴールに派遣されたが、間もなく熱病にかかり、本国に戻された。その後、彼女に



に適しているとして1890年に仙台に派遣された。その時、既に数名の婦人宣教師が仙台で活動していたが、彼女たちは自分たちの居宅に日本人少女を同居させ訓練を行うことにした。しかし、ある者は帰国し、他の者は東京に移転したので、残されたミードは1892年には尚綱女学会を開校した。同年11月にアニー・S・ブゼルが来仙した。

1895年3月22日の夕刻、ミードは点火した石油ランプを持って階下に下りる時、誤って転落し、燃え上がる灯油の火炎により上半身に大やけどを負った。大きな傷を負ったので治癒するまで数年を要した。1899年11月、私立学校令により設立が許可され、校名を私立尚綱女学校とし、ブゼルが校長に就任した。1902

年ミードは離仙し、山口県の下関伝道に従事した。1908年 ABMU の外国宣教主事が来日し、山口県の宣教拠点は南部バプテストに移譲された。

その頃、日本人牧師の間で婦人伝道師養成の必要が勧告され、1907年6月の宣教師会議で女子神学校の設立を決議し、婦人ミッション・ボードがそれに賛成した。学校は1908年10月26日にミードが大阪に到着するまで、ミス・ヒューズ Hughes が代行した。

開校当時、校舎、寄宿舎にあてられたのは二階建ての全長100フィート、外国人の部屋は通りから一番奥まった所にあり、玄関に近い日本人の居住する部屋の間口は9フィートであった。……最初は6名の学生で始まったが、最初の卒業生を出す前に増築か改築することが必要だった。当初よりそのことを予想していたので十三に新校地を求めた。そこは大きな樹木のある森に隣接する小高い台地であった。1912年12月に、まず30余名の収容が可能な3階建ての寄宿舎を完成してそこに移転した。寄宿舎には16の部屋があり、広間、教師の研究室、図書室（当初はチャペルと講義室として使用）、食堂、台所、舎監室があった。

1915年に二階にチャペルを持つ講義棟と宣教師館が完成し、彼女は女子神学生の教育と幼稚園の事業に専念した。ワインドは「学校は間もなくキリスト教的な奉仕の専門家を目指す選ばれた婦人たちの関心を引いた云々」、と記述している。

私自身は、1927（昭和2）年3月にミード社会館で開かれていた神愛幼稚園（ミード幼稚園）を卒業した者であるが、帰国間際

のミードから f(エフ) や l(エル) の発音の指導や英語の歌を教えられた懐かしい思い出がある。

参考文献

大島良雄 『日本につくした宣教師たち』 ヨルダン社 1991.11

大島良雄 『バプテストの東北伝道』 ダビデ社 2005.10

大島良雄 『バプテストの大阪地区伝道』 ダビデ社 2012.11

尚綱女学院 『尚綱女学院 100 年史』

5, Annie Syrena Buzzell アニー S ブゼル

ブゼルは 1866 年、マサチューセッツ州ローエル市にユグノー植民者の子孫として生まれ、開拓宣教師の父親ら家族と共に 1872 (明治 5) 年、ネブラスカ州に移住した。父は農業に従事すると共に開拓地の伝道にも参加し、後にジュニアタのバプテスト教会の牧師になった。母は信仰の



自由を重んじるフランスのユグノーの血を受け継いだ人で敬神な信仰を持っていた。アニーの姉は中国仙頭で宣教師として活動していたが病気で帰国していた。その姉から大きな影響を受け、彼女も外国伝道を志し、ギッポン・アカデミーを卒業後、6 年間小学校で教えた。その後、1892 年 4 月、西部婦人バプテスト外国伝道協会の宣教師に任命された。26 歳の時であった。ブゼルは 1892

年11月19日に仙台に着任した。同年8月にミードが学校を開校していたので、その働きに協力した。

卒業生は回顧し、「学校のまだ若い頃は聖書の授業時間が非常に多くて殆ど聖書学校の観があった。卒業までに、ブゼル先生は創世記から黙示録まで全部教え、其のうえ基督教教義も教えられた」云々と述べている。

先生について語る時、先生が第二高等学校の学生の要望に応じて始められたバイブル・クラスがある。それは、27～8年間継続し、歴史に名を残した人物を輩出した。先生は私生活において極めて質素で、衣服などは自分で生地を裁断し、裁縫された。休暇時も仙台を離れず、他の宣教師たちのように避暑地に出かけることはせず、仙台に留まり、家庭訪問などに時を過ごした。それが協調性に欠けると他の宣教師たちから非難された。日常生活においては絹のストッキングを着用した新任の宣教師が、それは贅沢であると非難されるようなこともあり、次第に仲間から敬遠される存在になり、排斥運動にまで発展した。

1919年7月21日、休暇帰米の途に就く。8月16日、校長退職し、1920年12月12日、米国より横浜帰着。尚綱を訪ねたが講壇に立ち挨拶する事も許さなかった。不本意の裡に次の活動拠点として遠野を選び、同月23日に庄司宗兵衛を伴って赴任した。その際、彼女が目指したのは出来るだけ土地の人々と同じように生活するために土地の人々の間に住まうことであった。「キリスト教が恐ろしいものではないこと」を知らせる事が必要であるとして、彼女が努めたことは、

- ①人々の本当の生活と文化を出来るだけ学ぶ事、即ち住民の一人として人々と一緒に生活することで彼らの信仰を理解し尊重する事。
 - ②全ての人々の友、役立つ隣人となり、家庭を開放する事。
 - ③人々と一緒に生活することで彼らの信仰を理解し尊重する事。
 - ④子どもたちのための仕事を始める事。
 - ⑤教会を全ての活動の中心とすること。すなわち、全ての事を教会の働きとする事
- と定め、1934年7月まで14年半に及ぶ活動において遂次実行に移した。

参考文献

- 高橋重人 『ブゼル先生伝』 1940（昭和15）年
大島良雄 『日本につくした宣教師たち』 1997.11 ヨルダン社
藤代 裕 『米国宣教師ミス・ブゼル みちのく遠野での15年』

6, Merry D. Jesee メリー D. ジェッシー

ジェッシーはバージニア州エッピングフォレスで、子ども11人の長女として生まれた。彼女の家は非常に裕福で、何人かの使用人を雇っていた。彼女は21歳まで、全ての教育を家庭教師から受けた。彼女はミズリー州立大学に入学して地質学を専攻した。…また学生ボランテ



ミアグループの活動にも参加した。それはキリストを知らない他の国の人々のために祈り、キリストを知らない世界がある事をアメリカ人に教え、海外の宣教師を支える資金集めを手伝う目的で作られた学生のグループだった。活動中に彼女は宣教師として働きたいと思うようになった。29歳で高校と大学の教員免許を取得し、1911年に日本に向けて出発した。

『尚綱女学院百年史』の年表に尚綱でのジェッシーの役割を見ると

1912年7月 ジェッシー来仙

1919年8月 ブゼル校長退任、名誉校長となる。帰米。

ジェッシー校長就任。同時に「高等科」（短大の前身）設立の準備が始まった。

1924年 ジェッシー校長は休暇帰国したが、「排日移民法」が成立した年で、尚綱の事業への援助を求める事は国民感情に反する困難な事であった。インディアナ州を訪ねた時に、ある会合で、一人の牧師が壇上に上がり、亡くなった娘の物であったダイヤモンドの指輪を実行委員長に渡し、売上金を尚綱の為に使って貰いたいと言った。その話を聞いた人々の間から援助運動が起こり、5万ドルが寄せられ、家事科にとって必要な建物を建てる事が出来た。中島丁の校門の近くにあったインディアナ・ビルがそれであった。

1926年 ジェッシー校長退職

- 1929年 高等科校舎（インディアナ・ビルディング）落成
1949年2月 ジェッシー 院長に就任
1950年3月 尚綱女学院短期大学の認定許可さる
1952年3月 ジェッシー 院長辞任
5月 ジェッシー 叙勲 勳四等
7月12日 離仙

ジェッシーは1912年の来仙以来40年もの間、尚綱女学校の霊肉の両面での充実・発展のためにその生涯を捧げられた。その象徴的存在が中島丁にあったインディアナ・ビルディングであった。それは彼女の休暇帰国の際にされたインディアナ州における募金活動に応えたものである。

参考文献

尚綱女学院『尚綱女学院百年史』

ロバータ・L・スティーブンス『根づいた花—メリー・D・ジェッシーと尚綱女学院』

キリスト教新聞社 2003

7, Ella Church エラ・チャーチ

『日ノ本 75年』によると日ノ本女学校が開校したのは1893年2月11日であつたが、チャーチの仮住まいの住宅から始められた。

エラ・チャーチは1861年8月5日に米



国コネチカット州ウェスト・ウイリングトンに生まれ、同バーミンガム・ハイスクールを卒業後、小学校の教師を9年間勤めた後、1888年宣教師に任命され、1889年6月にサンフランシスコを出港し、キダーの学校で暫く働いた後、1892年1月に神戸に移った。神戸の伝道地姫路に校舎兼寄宿舎と宣教師館を建て、日ノ本女学校を開校したのは1893年2月であった。

彼女が宣教師になろうと決意したのは、

- 1 a 外国の伝道地では、なお多くの働き人が必要とされていると思うから。
 - b 私は壮健であるから。
 - c 私は、この国でよりも外国での方がより良い貢献をなしえると思うから。
- 2 私の祖父の祈り。また私自身の祈りに直接答え給うた神の導き。

と、述べている。

建学の趣旨は、キリスト教的人格教育を基礎に、社会の中堅女性、賢く優雅な、よき家庭人を育てることとしている。その願い、祈りが祝され、現在は姫路市の郊外に短大を併設する高等女学校・日ノ本学園として発展している。彼女の業績についての詳細な記録についてはさらに調査する必要がある。

参考文献

THE SOURCE OF LIGHT A GRAPHIC HISTORY OF HINOMOTO GAKUEN

日ノ本学園 『日ノ本75年史』